flake girl

雪をつかまえる

——雪をつかまえる。
それが私の願いごと。

顔を洗って制服に着替えると、キッチンではすでに両親が朝食を食べ終えていた。

「おはよう」

ダイニングテーブルの向かいに座る父が、読んでいた新聞から天気欄のある紙面だけを私に差し出す。私は母が焼いた目玉焼きとトーストをそのままに、今日の天気図に目を凝らした。つけっぱなしのテレビからは全国各地の節分のニュースが流れている。

「雪ちゃん、早く食べなさい。お父さんもそろそろ時間じゃないの？」

母がお弁当を包みながら私たちを急かす。父はゆっくりとコートを羽織りながら「今日はどうだ？」と聞くので、私は「うん、降るかも」となるべく平静を装って答えた。父は満足げに頷いて折りたたみ傘をビジネスバッグに詰めこみ、私は半熟の卵の黄身にかぶりつく。

雪の結晶というものは、ひとつひとつ形が違うものらしい。

初めて自分で名前が書けるようになった頃には、もう雪が大好きだった。そして小学校の授業で白く丸いはずの雪がたくさんの美しい結晶から成り立っていることを知ったとき、私は心の底から激しく衝撃を受けたのだった。教科書に載っていた結晶写真は美しい左右対称の六角形で、牛乳のラベルで見たことのあるものから、花びらのようなもの、亀の甲羅みたいなものまで、様々な姿を写していた。

私が生まれた街で、私が見つける結晶は、いったいどんな形をしているだろうか。

いつからか、どこか知らない場所で採取された結晶写真ではない、本物の雪の結晶を見てみたいと思うようになっていた。
だが残念ながらこの街は雪が滅多に降らずに、高校生になったいまでもこの望みは叶わない。
私は手早く朝食を片付けると、鞄を持って学校に向かう。
今日こそは、雪の結晶が手に入るかもしれない。

陽が落ちるのが早い冬の黄昏を前に生徒はみんなそそくさと帰っていく。放課後、私は学校の

屋上で空を眺めていた。北からの強い風がフェンスを揺らしている。屋上は基本的にいつでも出入りが自由だが、この寒い時期にはほとんど誰もやってこない。見晴らしが良くて天気を観測するには絶好なこの場所に、私は化学部の活動がない日も欠かさず立ち寄っていた。

　鳥かごみたいに高くそびえ立った柵越しに空を見上げて、ラジオで天気予報を聴き、携帯電話で高層天気図を確認する。今の気温はほぼ零度。上空の気温はマイナス三十二度。予想よりもやや気温は高いものの、夜には降り出すかもしれなかった。雪よ降れと念を送る。

　ガチャンと音がして校舎に続くドアが開いた。話し声で同級生の不良男子たちだとわかる。おおかた煙草でも吸いに来たのだろう。屋上は先生の見回りも厳しいのに、彼らはスリルを楽しむかのようにわざとここにやってくる。

　橘が真っ先に私に気付いて
「お、雪女がおる」とこれ見よがしに言った。

　私は黙って空を見つめ続けた。奥山が懲りずにからかってくる。確かに、私は天気が良いとがっかりする女だ。だからといって茶化されていい存在だとも思ってない。

「おーい、雪女ぁ。ここはヒマラヤちゃうでぇ」

「ほっとけよ」と普段無口な久保田くんが低い声で言っているのが聞こえた。

「あいつ、いっつもここで空見てるよな」

「ぼさっとしてると探検家に見つかるぞ」

　橘くんと奥山くんがいつまでもしつこいので、私はうんざりして校舎に戻ることにした。男子というのは、どうしてこうも子供っぽいのだろう。

「おっとっと。触れると凍死するでぇ」

　三人の脇を通り過ぎるとき、橘くんが大げさに私をよけた。私は冷えきった手を奥山くんの首に押しつけて「ひゃっ」と乙女のような悲鳴をあげさせると、一目散に逃げ出した。風情のわからない奴は勝手に震えていればいい。本物の雪女よりもきっと、私は雪に飢えている。

フレイクガール

午前一時の空はなんて孤高なのだろう。空は闇に覆われ星屑すら見えない。

私は夕食とお風呂を済ませた後にこっそり家を抜け出すと、また学校の屋上にやってきた。このぼろい学校には宿直の先生以外に警備体制と呼べるものがなにもない。そのおかげで私は過去にも雪の予感に駆られていままでも何度も学校に忍び込んでいる。そのときは残念ながらすべて無駄足に終わっていた。

でも今夜は違う。
この夜の冷たさ。
気配をひしひしと感じている。

私は化学部の部長として預かっている理科準備室の鍵で、宿直の先生に見つからないよう細心の注意を払って延長コードを継ぎ合わせた蛍光スタンドを屋上まで運び込んだ。同時にスライドグラスとカバーグラス、光硬化性樹脂も見繕ってくる。風はないが寒さが骨に染みいるほど空気が澄んでいた。私は課外授業用に常備してある寝袋まで引っ張り出してきて仰向けに寝転がった。

これで夜空を満遍なく眺められる。
寝袋越しにコンクリートの冷たさが響いてくるなかで、私は雪が降りてくるのをじっと待ち続けた。

空一面に雪の結晶が瞬いていた。りんりんと氷の冷たさをかき鳴らし、きらきらと割れた硝子みたいに輝いている。まるで雪の星座だ。結晶のシリウス、プロキオン、ペテルギウスが美しい冬の大三角形を描いて、私は息を飲んでその光景を見つめている。手を伸ばせば届きそうなオリオン座が、くるくると車輪のようにまわった。

凍てつく空気にはっと私は目を覚ました。寒さのせいで意識が遠くなってしまい、時計を見ると二時間近くも経っていた。ぞくっとしてくしゃみをする。
夜はまだ暗く冷ややかだった。凍えるあまり危うく永久の眠りにつくところで、私は気持ちを立て直して震えながらも雪が降るのを待ち構える。気温はマイナス四度。結晶が出来るぎりぎりの温度。足の指先が冷えて痛い。でも寒いほど私の体は期待で熱が高まり、胸は張り裂けるほどに踊った。もうすぐだと予感がする。

――いよいよだ。
雪を捕まえる瞬間が近づいている。

やがて午前四時を通り過ぎた頃、寒空の雲の傘から零れ落ちるように白い小さな点がぱらぱらと舞い降りてきた。思わず私は歓喜の声をあげる。雪のひとひらがゆっくりと目の前を通り過ぎて、私のぐるぐるに巻いたマフラーの上にふわりと乗った。

その小さな結晶を壊さないようハケですくい、慎重にスライドグラスの上に載せて、光硬化性樹脂を数滴垂らしたあとカバーグラスで圧着する。完成したプレパラートをすぐさま蛍光灯で照射しながら、私は光に照らされる右上にややいびつに膨らんだ六角形をうっとりと眺めた。気温の低さが足りないせいで、写真のような精密な標本には及ばない。

それでもこれが、この街の、雪のかたち。

樹脂が固まったのを十分に確認してから、私はそっと結晶を抱きしめた。残念なことにひとつめの結晶にかかり切っているあいだに、雪はすぐに止んでしまった。地面に落ちた雪はすべて消えてなくなってしまい、この手元のプレパラートがなければ、いまだ夢を見ている気分だったろう。

空はまだ明るさを見せはしないが、親に見つからぬように朝までには帰りつかなければならない。そろそろタイムリミットだった。
私は慌ただしく機材を片付けて、暗闇のうちに学校を後にした。

雪のあと

　まだまだ足りなかった。

　――また降ればいいのに。

　学校を抜け出したあといつまでも名残惜しく空を見上げながら歩いていた。無人の商店街の角を曲がるところで自転車に轢かれそうになる。私がわあっと声を上げると、自転車は慌ててハンドルをきって錆びたブレーキ音を響かせた。間一髪で互いに顔を見合わせると、自転車に乗っていたのは目を丸くしたパーカー姿の久保田くんだった。

「……びびらせんなよ。こんなとこで何してるんだよ？」

「ねえ、さっき雪が降ったの知ってる？」

　怪訝な顔をする久保田くんの問いを無視して私は尋ねる。一刻も早くこの成果を聞かせたかった。

「あー、そういや少し降ってたかなぁ」

「ジャーン！　ほら見て！　雪の結晶！」

　私は妙に高いテンションで出来たばかりのプレパラートを彼にみせた。言っておいてなんだが結晶は肉眼ではほとんどわからない。この夜空の下ではなおさらだ。

「ちっさくてよくわかんねえよ」

　彼はしばらく眺めた後そうぼやいた。

「じゃあ今日の放課後、理科室に来てよっ。顕微鏡で見たら超キレイなんだよ！」

　彼が不思議そうな顔をして私を見ているのに気がついた。まくし立てるように話していたのが急に恥ずかしくなる。なぜ彼にこんな話をしているのだろう。

「……ごめん。……く、久保田くんこそ、こんな夜中に何してたの？」

「バイト」

　よく見ると年季の入った自転車の荷台には、新聞がぎっつりと積み込まれていた。

「これから帰るのか？」久保田くんが訊いた。

「そうだよ」

「乗れよ」

　久保田くんはそう言って私に自転車を差し出した。荷台に積まれた新聞で二人乗りをするほどの余裕はない。かといってのんびり歩いて配達を遅らせてしまう訳にもいかないから、代わりに乗れということらしかった。

「え、じゃあ久保田くんはどうするの？」

「……走る」

　答えを待たずに久保田くんは駈け出していく。私は慌てて自転車に跨がって彼のあとを追いかけた。次々と新聞を投函していく久保田くんの横を、私はコーチみたいに併走する。昔ながらの無骨な自転車はペダルが酷く重かった。久保田くんはポストに新聞を入れながら、「雪、好きなんだな」とぽつりと口にした。

「うん。久保田くんは？」

「別に。……晴れてりゃいいさ」

　新聞が濡れるからな、と彼は言う。走る彼の体からは白い湯気が立ちのぼり、私は彼のペースに合わせて懸命に自転車を漕いだ。とうとう自宅の前までやって来て私はようやく自転車から解放される。送ってくれたお礼を述べる私に、久保田くんは黙って新聞を手渡した。

「なにこれ。　え？　もしかして、うちの新聞？」

　久保田くんが頷いた。毎日読んでいる新聞を同級生が配達していたとは思わなかった。

「……放課後、理科室でいいんだよな？」

「え？」

私が戸惑ってるうちに久保くんは「じゃあ」と言って去っていく。私は軽々と自転車を漕いでいく彼の後姿と、その延長線上にある薄明かりの空を見送った。　そしてまだ夜露の手触りが残る新聞をぎゅっと握って、これからの天気に想いを馳せる。

雪が降れば最高だ。だけど晴れていたって、それも悪くない気がした。

あとがき

このお話については三題噺ではなく、雪から連想され
とある地方文学賞で箸にも棒にもかからなかった作品です。

ちょっとありきたりでストレートすぎるかなと思いつつ、
捨てるには愛着があって忍びがたく、こうして掲載させて頂きました。

まだまだ荒削りというか、十分じゃない作品という自覚はあります。
最後の一文も蛇足になりやしないか迷いつつも、伝えたいことはストレートに
伝えきってしまえばいいというスタンスで書ききってしまいました。

ちなみに
ここで記載しているプレパラート作成方法について間違いはないはずですが、
実際には良質な結晶プレパラートを作成するにはもっと気象条件が厳しくないといけないようです。
関東圏より北に行ったことがないので、いつかは雪国にも足を伸ばしてみたいものです。

脱線しましたが……
……少しでも楽しんで頂けましたでしょうか？

最後まで目を通して頂いた、すべての方に感謝をいたします。

2013/9/29 第一版 恵賭

コメントに感想など頂けると嬉しいです。